

何もない遊園地

北村正裕

© Masahiro Kitamura

目次

- プロローグ (何もない遊園地)
- 第1話 探偵の部屋
- 第2話 捨てられたおもちゃたち
- 第3話 ガラスの木馬
- 第4話 悲しみの国
- 第5話 終わらない物語の部屋
- 第6話 ロム博士の話
- 第7話 光の城の崩壊
- 第8話 永遠の出会い
- エピローグ (月夜の国への旅立ち)

プロローグ（何もない遊園地）

「ようこそ、何もない遊園地へ」

声に気付いて、はっ、とした少年が振り返ると、そこには、やや小柄で、おとなしそうな、ひとりの老人が立っていた。そして、少年は、自分が、いつのまにか、どこまでも広がるような広野の中に立っていることに気が付いた。空は、夕焼け色の薄明かりで、小鳥の鳴き声も聞こえないところをみると、どうやら、ちょうど日の沈んだところらしい、と、少年は思った。

「ここは？」

「ようこそ、何もない遊園地へ」

「何もない遊園地だって？ それじゃあ、ここが……」

一度も聞いた事の無い場所を、ずっと前から知っているように感じるのは、不思議な事だ。しかも、少年には、何だか、自分が、今までずっと、この場所を探していたような気がするのだった。

「そう。ここは、何もない遊園地。誰も知らない遊園地。バスに乗っても、電車に乗っても、決して行けない遊園地。どんな地図にもものってない、どこにも無い遊園地」

「それじゃあ、どうして僕は……」

老人は、穏やかな表情をしたまま、少年の問いには何も答えず、代わりに、

「今夜は、満月だな」

と、つぶやいた。そして、それから、少年に語りかけた。

「さあ、サフィ君。もうすぐ、天の振り子が揺れて、星のゴンドラが降りて来る。そうして、時の精リーズが現れる」

「え？ サフィ？ それが、僕の名前？」

そういえば、少年は、自分の名前の記憶さえ持ち合わせてはいないのだった。

「いったい、僕は、ここへ、何をしに来たんだろう？ それに、そもそも、いったい、僕は、誰なんだ？」

「そう。その答えを探すために、君は、ここへやって来たんだ」

老人は、静かに答えた。

「その答えを探すため？」

「そう。君が誰で、そして、何のためにここへやって来たのか？ その答えを探すために、君は、ここへやって来たんだ。もうすぐ、星のゴンドラが降りて来る。どこにもない木馬が、動き出す。君を乗せて、旅に出る。時の国へ、時を越えて。時の精に導かれて」

「どこにもない木馬だって？」

「そう。さあ、私は、もう、そろそろ失礼しなくてはいけない。それじゃあ、どうぞ、ごゆっくり」

そう言うと、老人は、少年に背を向けて、ゆっくりと、その場を立ち去ろうとした。

「もうすぐ、星のゴンドラが降りて来る……」

「あ！ 待って下さい。いったい、あなたは……？」

誰なんですか、と、言おうとした時には、もう、老人の姿は、そこにはなかった。まるで、影のように、すうっと、夕闇の中に消えてしまったのだ。後に残された少年は、ただ、ぼうぜんと、広野の中に、立ちつくすだけだった。

「でも、あのひとの声……」

どこかで聴いたことがある、と、少年は、おもった。だが、それが誰の声だかは、やはり、わからなかった。

と、突然、少年は、夜の迫る空に、不思議な気配を感じた。

「あ！」

空を見上げた少年は、得体の知れない巨大な丸い物体が、ゆっくりと、斜めに降りて来るのを見た。

「ユーフォー？ 巨大隕石？」

だが、それは、地平線へ到達することはなく、大きな弧を描いて、再び、地平線から遠ざかり、そして、また、ゆっくりと、下へ降りて来た。

「振り子！？」

確かに、それは、振り子だった。天上からぶら下がった、巨大な振り子。

「天の振り子？」

少年は、さっきの老人が、確か、そんな事を言っていた事を思い出した。だが、この、天の振り子と言うのは、いったい、何物なんだろう？

考えているうちに、しかし、その巨大な、影のような振り子は、すうっと、空の闇の中に、飲み込まれてしまった。いつのまにか、あたりは、すっかり、暗く、もう、夜の世界に変わっていた。空には、無数の星が、輝いていた。そして、まもなく、それらの星たちの中のひとつが、にわかに輝きを増し始め、どんどんと大きくなりながら、ゆっくりと、下の方へ降りて来るのを、少年は見た。

「これが、星のゴンドラ？」

少年が、再び、老人の言葉を思い出している間もなく、その「星のゴンドラ」は、どんどんと、地上に近付き、やがて、それに誰かが乗っているのが、少年の目にもわかるようになり、そして、ゴンドラは、静かに、着陸した。

「誰だろう？」

少年が駆け寄って行くと、ゴンドラから降りて来たのは、美しい女の人のようだった。だが、彼女が人間でないという事は、すぐにわかった。彼女はゴンドラのへりをまたぎもせず、また、扉を開けるでもなく、すうっと、滑るように、ゴンドラから外へ出て来たのだった。そして、彼女が降りると、「星のゴンドラ」は、まぶしいほどだった輝きを鎮め、彼女が短い杖でそっと触れると、それは、小さなボートに、姿を

変えた。それから、彼女が、空に向けて杖を振り上げると、不意に、あたりに、薄明かりが射しはじめた。「何の光だろう？」

不思議に思って、少年が空を見上げると、さっきまで出ていなかったはずの月、それも、満月が、夜空に輝いて、その光が、少年たちのいる広野を照らしているのだった。明らかに、彼女は、妖精だった。

「時の精？」

少年は、また、さっきの老人の言葉を思い出しながら、つぶやいた。

「そう。私は、時の精リーズ」

妖精が答えた。時の精リーズは、薄いライラック色の衣装をまとった美しい妖精だった。

「さあ、サフィ。お乗りなさい」

リーズは、広野に置かれた、さっきの小さいボートに、先に乗りこみながら、少年をうながした。

「どこへ行くんですか？」

「森へ行きましょう」

「森へ？」

「そう。木漏れ日のある森へ」

少年サフィは、時の精リーズの、澄んだ、美しい声にひかれて、ボートに乗りこんだ。すると、ボートは、広野の上を、滑るように、動き出した。

「僕は、いったい……？」

「あなたは、サフィ。あなたが何をしに来たのか……、その答えを探すために、あなたは、月夜の国へやって来たのです」

「月夜の国？」

「そう。さあ、ごらんなさい」

リーズは、ボートのまわりを手で示しながら言った。そして、サフィは、月の光が照らすボートのまわり、そして、さらに、もっと遠くに目をやった。すると、どうだろう。夜空はもとより、地面の上にも、空中にも、無数の星たちが輝いているではないか。そればかりか、何と、地中深くにまでも、たくさんの星が輝いていて、それらの光が、地中を通り抜けて、サフィの目に見えるのだった。まるで、サフィたちの乗ったボートが、夜空の中を、飛んでいるかのようにだった。おまけに、そのボートまでもが、静かな光を放っていて、それ自身、夜空の中の、ひとつの星のようだった。

「これが、月夜の国？」

「そうです。月夜の国にやって来た人には、太陽の国の住人たちには決して見えない、たくさんの星たちの光が見えるのです。さあ、あれを見てごらんなさい」

リーズは、ボートのはるか前方を手でしめした。サフィがそちらをみると、月夜のもと、広野の向こうに、盛り上がった森のようなものが、見えてきた。森は、黒く盛り上がってはいたが、その中からは、無数の星の光のような、不思議な木漏れ日が飛びかっているのが、はっきり見えた。

「あれが、木漏れ日のある森？」

「そうです。私達は、あそこへ向かっているのです」

リーズがそう答えている間にも、ボートは、無数の星たちの光の間を通り抜けて進んで行った。青い光、白い光、黄色っぽい光……。夜空を見上げると、天の川も見えるし、いくつかの流れ星も見えた。そして、ボートは、まもなく、木漏れ日のある森の入口に到着した。

森のまわりには、月見草が咲いていて、それで、少年サフィには、今が、夏の夜だという事がわかった。サフィと時の精リーズが乗ったボートは、森の中には行って行った。中には行って行くと、月の光だけではなく、不思議な星の光のような木漏れ日が、まわりのあちこちからこぼれて来るのだった。

「これは、魔法の森だ。ここには、何か、怪しい秘密が隠されているに違いない」

と、サフィは思った。すると、ちょうどその時、ボートが静かに止まった。そして、リーズが例の短い杖を振り上げると、どうだろう。森の中に、海の波打ち際のような風景があらわれたのだ。

「あれは、湖？」

「いいえ、あれは、海辺の少女の幻影です」

リーズが答えた。

「海辺の少女の幻影？」

サフィは、その不思議な風景に目を凝らしてみた。すると、リーズの言う通り、幻の海辺の波打ち際に、月の光に照らされて、少しうつむきかげんに、ひとりの少女が立っていた。

「ああ、あれは、あのこだ」

サフィは、その少女のことを知っているような気がした。でも、少女が誰なのかは、わからなかった。そして、前に、いつ会ったのか、さらに、そもそも、ほんとうに会ったことがあるのかも、まったく、わからなかった。サフィは、すぐに、ボートから降りて、少女が立つ海辺の波打ち際の方へ、駆け出した。だが、サフィが近付くにつれて、少女の姿は、影のように、だんだんと薄くなり、その場にたどりついたと思った時には、もう、どこにも見当たらなかった。サフィは、さらに、あたりを歩きまわって、少女の姿を探し求めたが、少女の姿は、どこにも見つからなかった。そればかりか、いつのまにか、海辺の風景さえ消えてしまい、波の音は、いつしか、森の木の葉のざわめきの音に変わっているのだった。そして、気が付くと、いつのまにか、リーズも、彼女のボートも、どこにも見当たらなくなってしまっていた。しかたなく、サフィは、森の中を、当てもなく、とぼとぼと、歩いて行った。すると、やがて、木漏れ日に照らされて、一軒の、粗末な感じの、古い小屋があるのが、見つかった。サフィは、小屋に近付き、その外壁に手を触れて、そっと、こすってみた。

「お菓子の家ではなさそうだな」

サフィは、グリム童話の、ヘンゼルとグレーテルの話を思い出しながら、そう、つぶやいた。そして、入口の扉を開けて、ゆっくりと、小屋の中へ、はいって行った。

第1話 探偵の部屋

「いらっしゃいませ」

サフィがはいって行くと、小屋の中から、老人のような、静かな声が聞こえて来た。見ると、天井からぶら下がった裸電球の下に、小さな机が置いてあり、それに向かって、ひとりの老人が、粗末な椅子に腰掛けて、机の上の、古い、分厚い本に目を落としていた。

「お待ちしていました。森の探偵事務所へ、ようこそ」

老人は、サフィを見ると、椅子から立ち上がって、言った。サフィは、さっき、時の精リーズに会う前に広野の中で声をかけて来た老人に似ているなど思った。しかし、今度の老人は、さっきの老人よりも、もっと年をとっているようすで、髪も白く、声も弱々しかった。

「ご依頼の件は、既に、わかっています、サフィ君」

「あなたは？ どうして、僕の名前を……？」

サフィは、驚いて、尋ねたが、老人は、

「私は、この探偵事務所の所長です」

とだけ答えた。

「で、僕の用件というのは？」

サフィは、逆に、尋ねた。

「そもそも、あなたが、この、月夜の国へやって来たのは、あなたが、何のためにここへやって来たのか、そのわけを探すためです。ですから、今、あなたが、ここへやって来たのも、当然、その目的のために、違いないではありませんか」

老人にそう言われると、なんだか、サフィにも、もっともらしく聞こえるのだった。

「では、ここで……？」

「ここには、私を含めて、大勢の優秀な探偵がいます。ですから、完全に解決というわけにはいかなくても、きっと、何か、良い手掛かりが見つかるでしょう。さあ、こちらへどうぞ」

老人は、そう言いながら、部屋の奥の壁にある扉を開けて、次の部屋へ、サフィを案内した。サフィは、「私を含めて」という、老人の言葉に、不安を感じながらも、老人にしたがって、隣の部屋へ、はいつていった。すると、老人は、サフィの不安に追い打ちをかけるように、こう言うのだった。

「ここは、探偵の部屋です。ですから、サフィ君、あなたも、ここへはいつたからには、当事務所の、優秀な探偵のひとりだという事を忘れてはいけません」

探偵の部屋には、サフィと同じ位の年の少年、少女たちから、所長さんと同じような年をとった人達まで、いろいろな「探偵」たちが、真剣に討論をしていた。サフィが、適当な場所を探して、空いている椅子に腰を降ろした時、ちょうど、サフィと同じ位の年の少年が、口を開いた。

「僕は、太陽の国のエリート選抜試験に落ちて、太陽の国から追放されたんだ。それで、この、月夜の国へやって来たんだけど、だから、太陽の国の企みを調べるには、僕がまだ持っている、太陽の国のエリート選抜試験の受験参考書が、役に立つんじゃないかと思うんだ」

その少年は、カバンの中から、その受験参考書を取り出して見せながら、話を続けた。

「僕は、言語学や、数学、自然科学などは、みな得意だったんだけど、個性の得点というのが低くて、それで、エリート選抜試験に受からなかったんだ」

「個性の得点？」

聴いていた何人かの探偵が、ほとんど同時に、聞き返した。

「そう。これが、個性の得点の一覧表です」

少年の探偵は、受験参考書の中のページを示しながら、説明を続けた。受験参考書には、受験生の具体的な行動例と得点との関係、そして、高い個性点をとるための対策が書かれていた。

「例えば、学校の中で、生徒同士のけんかを止めると、仲裁点という個性点になります。ただし、けんかの当事者のどちらかが非常に強い場合には、仲裁は、たいてい、失敗します。ですから、この仲裁点の対策の基本は、弱い者同士の、たいしたことのないけんかを探して、その間にはいることです。もし、適当なけんかが見つからない場合には、自分でけんかを作ることも必要です」

「自分で、誰かとけんかをするのかい？」

所長さんより少し若そうな感じの、おばさんの探偵が、少年の探偵に尋ねた。

「いいえ。もちろん、自分でけんかをしたのではだめです。そんな事したら、たとえどんな理由であれ、逆に、大きな、マイナス点になってしまいます。自分でけんかをするのではなく、他人にけんかをさせるのです」

「でも、どうやって？」

おばさんの探偵が、再び尋ねた。

「例えば、誰か、エイ君ならエイ君としましょう。まず、その、エイ君から何か、例えば、いくらかのお金を盗んで、それを、どこか、エイ君がお金を置き忘れそうな場所に隠します」

「まあ？」

「それから、学校の中で、ビー君がエイ君のお金を盗んだらしいという噂を流します。ここまでうまくいけば、もう、準備は完了です。後は、けんかを始めたふたりの間にはいって、お金を捜してみる事を勧め、見つかったところで、ビー君をなだめ、エイ君には、ビー君に謝らせれば、もう、満点です」

「そんなインチキで、点が取れるなんて……」

「しかし、……」

と、今度は、お婆さんの探偵より、もう少し若そうな感じの、サラリーマン風の探偵が、口をはさんだ。

「お金を盗むのも良くないけど、噂を流すというのは、簡単ではないだろう」

「もちろんです。もし、これが、本格的に出来るようなら、それこそ、それは、いわゆる営業能力点として、高く評価されます。一流の学習塾では、そのための対策も教えているようです。でも、普通は、さっきのような場合には、お金を盗むのも、噂を流すのも、信頼できるプロの業者に任せるのです」

「何だって？」

「多くの場合は、業者は、学習塾で紹介してくれますし、業者と提携したり、中には、直営している所もあります」

「でも、そんなインチキ、すぐにバレてしまうだろう？」

「それが、そうでもないんです。学校も、試験センターも、子供たちの世界の事は、何もわかっていませんから。わかる人には、選抜試験なんて、ばかばかしいから、そういう人は、エリートにはなれないんです」

「ひどい話だなあ」

サラリーマン風の探偵は、ため息をついた。

「福祉点というのも重要です」

と、少年の探偵は続けた。

「公認の福祉施設へ通って、お年寄りの世話をすれば、その日数と時間数が、福祉点となります。そのために、自分の家にいる寝たきりのお婆あさんの事はほったらかしにして、せつせと、公認の福祉施設に通っている子供が、たくさんいます。自分の家での手伝いなどは、評価の対象にはならないからです。もちろん、福祉施設での手伝いだって、その内容までは評価されませんから、ただ、通っているだけ、という子供が、大部分です」

「ううん……」

聴いていた探偵たちは、みな、考え込んでいるようすだった。

「動物愛護点という個性点もあります。学校では、これを評価するために、どこでも、必ず、何か、例えば、うさぎとか、にわとりとかを飼っています。そして、これらの動物の世話を積極的にやった子供に、動物愛護点が付くわけです。中には、動物にこっそりと毒を与え、動物がよわったところで、いかにも心配そうに、動物に付き添い、薬を買って来て、介抱する子供もいます。そして、動物が回復すれば、大いに喜んで見せるし、また、死んでしまった場合には、いかにも悲しそうに嘆いてみせ、動物のお墓を作るのです」

「で、君は、そういう事をしなかったわけだね」

「はい」

「それは、良い事だ。それで、エリートになれないというなら、ならない方がいいさ。でも、君の話し方を聴いていると、とても明解で、しかも、批判的精神が、よく現れていると思うんだけど、こういう能力は、評価の対象にはならないのかい？」

サラリーマン風の探偵が、尋ねた。

「評価どころか、こういうのは、大きなマイナス点になってしまいます。エリート機構に疑問を抱く者は、エリートたちにとって、最も排除しなくてはならない者なのです」

「そう。私も、それで、太陽の国から追放されたんです」

いかにも、しっかり者という感じの、利発そうな少女の探偵が発言した。

「私は、教育問題の討論集会を企画、主宰したり、新聞を発行したりして、太陽の国のエリート機構を批判したり、選抜試験の不正を追求したりして、それが、致命的なマイナス点になったのです。逆に、学校の教師に気に入られるように、贈り物などを欠かさず、また、教師に批判的な生徒の活動を妨害したりすれば、教師の裁量による特別個性点で、大きなプラスになります」

「そうそう。僕の場合は、そういう点では、おとなしくしていたから、大きなマイナス点はなかったと思うけど、個性点を稼ぐための積極的な活動をしていなかったから、……」

「なるほど」

サラリーマン風の探偵が、うなずいた。

「でも、そんな所だったら、さっさと出て来て、かえって、良かったんじゃないの？」

お婆さんの探偵が言った。

「まったくだ。俺なんか、はじめから、エリートなんて、全然関係なかったけど、聴いてみると、かえって、良かったと思うな」

作業服姿の探偵も同意した。

「ところで、……」

と、お婆さんの探偵が、突然、サフィの方を見て言った。

「あんたも、エリート選抜試験に落ちたのかい？」

「え？ ああ。あのう……。僕は、違うんです。ううん。多分、違うと思います」

「多分？」

サフィは、答えに困った。なにしろ、サフィは、この、月夜の国へ来る前の事など、さっぱり、思い出せなかったからだ。

「僕、思い出せないんです」

「思い出せない？」

「説明しましょう」

口をはさんだのは、所長さんだった。

「彼は、サフィ君ていうんだけど、彼は、この月夜の国へ、いったい何をしに来たのか、その答えを探すために、ここへやって来たのです」

「なるほど」

所長さんの一言で、探偵たちは、みな、納得したようすだった。

「しかし、本当に、いったい、僕は、どうして、ここへやって来たんだろう？　そもそも、僕は、何者なんだろう？」

サフィは、本当に、考え込んでしまった。

「確かに、そういう問題は、太陽の国では、決して、解明出来ない問題だ。きっと、ここでは、何か手掛かりがつかめるだろう」

サラリーマン風の探偵が、サフィに、励ますように言った。

「ところで、例の、太陽の国の侵攻の問題だけど、……」

と、所長さんが切り出した。

「確かに、向こうは手強いけれど、弱点もあるんじゃないかな」

「私も、そう思います」

と、少女の探偵が応じた。

「私たちは、ある程度、彼らのやり方を知っているけれど、彼らには、ほとんど、私達の事が、見えていないんです」

「そうかも知れない」

今度は、サラリーマン風の探偵が、うなずいた。

「いわば、向こうは、光の国。それに対して、こちらは、闇の国だ。闇の側から光の世界を見るのは簡単だけれど、反対に、光の世界の方から闇の世界を見るのは、ほとんど、不可能な事だ。現に、さっきの、彼のエリート選抜試験の話を聴くと、エリーートのばかばかしさがわかる者は、太陽の国のエリートにはなれないようだから、向こうは、もう、弱点のかたまりのようなものじゃあないかな」

「そうだよ」

と、今度は、作業服姿の探偵が、話し始めた。

「だいいち、太陽の国の光の城だって、俺達がいなけりゃ、出来なかったんだ」

「彼らの方でも、よくはわからないながらも、我々の世界の存在を恐がっているんだろう」

と、サラリーマン風の探偵が、続けた。

「だからこそ、この月夜の国にまで光の城を作ったりして、我々の世界を滅ぼそうとしているんだ」

「でも、それは、必ず失敗するわ。成功させてなるものですか」

少女の探偵が、きっぱりとした口調で言った。

「そうだ。前に奴等が月夜の国の中に作った光の城だって、結局は、つぶれたんだから」

作業服姿の探偵が言った。

「そうだね。でも、……」

と、おばさんの探偵が、口をはさんだ。

「でも、今度は、あの城を再興しようとしているんだろう？ てことは、何か、新しい作戦を持っているんじゃないかねえ」

「問題は、そこなんだよ」

所長さんが、腕組みをしながら、言った。

「最近、木の葉のざわめきといい、星の木漏れ日といい、どうも、ようすがおかしいんだ」

「と、言うത്？」

探偵たちは、みな、いっせいに、所長さんの方に顔を向けた。

「何とというか、とにかく、今まで親しんできた、この、月夜の国の風や、闇の光とは、何か違う、不吉な感じの風や光の気配が漂っているように思えてねえ……」

「そうそう、私もそんな気がするんだよ」

おばさんの探偵が、うなずきながら、言った。

「ふうん……」

探偵たちの間に、不安な空気が漂ってきた。もちろん、サフィも、何となく不安な気分になってきた。

「太陽の国の、新たな侵攻は、もう、始まっているんじゃないか……」

「もしかすると、この、探偵事務所なんかは、一番の攻撃目標になって……」

サフィが、そう言おうとした時、突然、大きな地響きがしたかと思うと、どこから射しこんできたのか、強烈な光が炸裂して、探偵事務所の小屋は、がらがらと、音を立てて崩れはじめた。

「しまった。みんな、早く逃げるんだ！」

所長さんが叫んだ。探偵たちは、あわてて、とにかく、小屋から脱出しようとして、走り出した。サフィも、必死の思いで小屋を抜け出し、木漏れ日のある森へと逃げ込んだ。